

デジタルハリウッド大学

2025 年度 一般選抜 B 方式

国語 [60 分]

【 注 意 事 項 】

1. 試験監督の指示があるまでは、問題冊子は開かないこと。
2. 試験監督から指示があったら、解答用紙に氏名・受験番号を正確に記入し、受験番号マーク欄にも受験番号を正確にマークすること。
3. 試験開始の合図後、この問題冊子を開き、36 ページ(白紙ページ含む)揃っているか確認すること。
4. 乱丁、落丁、印刷不鮮明などがある場合は、手を挙げて試験監督に知らせること。
5. 解答は、すべて別紙の解答用紙の解答欄にマークすること。
6. 試験開始から終了までの間は、試験教室から退出できません。
7. 不正行為を行った場合は、その時点で受験の中止と退室を指示され、同日受験したすべての科目の成績が無効となる。
8. 解答用紙は試験終了後、回収される。問題冊子は持ち帰っても良い。

これは2ページ目です。
次のページから問題が始まります。

第一問 次の小説の一節を読んで、後の設問に答えなさい。

琴平達也^{ことひらひつや}（ぼく）は売れない劇団員だったが、二・五次元（マンガ・アニメ・ゲームなどの二次元作品を、演劇やミュージカルなどの三次元で再現した作品）の舞台に、阿里山曆^{ありさんこよみ}の代役として出演を依頼され、初挑戦ながら引き受けることにした。本文は、稽古場での稽古の最終日と本番前日、当日の場面である。

「もうすぐ本番だね。琴平くんは、キャリアもあるから大丈夫だと思うけど、なにか困ったこととか、不安に思っていることとかない？」
座長という立場だから、こうやって声を掛けているのだろう。

「今さら言うのも変かもしれないんですけど……（注）プロジェクトマッピングの件です」

胡桃沢^{くるみざわ}が軽く首を傾げる^{かし}。

「まだ、実際の映像って見たことないんですね。立ち位置や動きだけが厳密に決められているだけで。だから、正直、まだ実感がありません。客席からどう見えるか。舞台稽古をしたら、もう少しわかるようになるんでしょうか」

今回、ぼくは、巨大な火の妖怪とひとりで立ち回りをする事になっている。その火の妖怪は、ラフ画でしか見ていない。そんな状態で、上手く気持ちが入るのだろうか。

胡桃沢は意味深に笑った。

「いいこと教えてあげようか。実をいうと、舞台稽古でもわからないし、本番になってもわからないよ」

「-」

「プロジェクションマッピングは平面の映像だからね。ちよつとは視界に入るし、全然見えないわけじゃない。でも、ぼくたちは舞台上で、立体の彼らを想定して、演技しなきゃならない。何十公演やっても、全然わからないし、ようやく客席からどう見えているかわかるのは、舞台の映像を観たときかな」

シリーズの主演をやっている彼がそう言うのなら、そうなのだろう。だが、このままなにもつかめていないような気持ちで、舞台に立って大丈夫なのだろうか。

「でもね。不思議なことに、^①お客さんが入ると、少しだけわかるんだ。お客さんがドキドキして、息を呑んで、目を見張って、こちらを見ている。だから、そのお客さんの感情を頼りに、ぼくたちもそこになにかが存在することを信じていることができる」

「『逆じゃなくて?』」

「もちろん、ぼくたちが演技することで、お客さんがなにかを受け取ってくれる部分もあるだろう。でも、観客の入っていない劇場と、入っている劇場では、ぼくらが受け取るものも全然違うんだ。だから、心配しなくていい」

胡桃沢にそう言われると、なんだかそんな気持ちになるのが不思議だった。

初日の前日、本番となにもかも同じに通す、ゲネプロという稽古がはじまる。

ゲネプロはマスコミの取材が入ったり、映像を記録として残したりもする。完全にマスクを外して稽古をするのも、今日がはじめてだ。

俳優、スタッフ全員のPCR検査が陰性だという結果が出たのも今朝になってからだ。もうコロナ禍になって三年近く経^たつが、結果を聞くまではいつもドキドキする。

誰かひとり、陽性者がでるだけで、すべてが⑥仕切り直しになる。以前のようにすべて公演中止になるようなことは減ったが、やはり数日間は幕を上げられない。

ぼくが、キャストとスタッフ以外の前で、青イタチとして存在するのも、この日が最初になる。

六百人以上が入る大きな劇場なのに、東京公演のチケットは完売だと聞いた。^(注)アンサンブルとして、もっと大きな劇場に立ったことはあるが、メインキャストとしてこの規模の劇場に立つのは生まれてはじめてだ。初日は配信もあると聞いている。

はじめてのことだから、緊張はするが、ここまできたらもう気にしても仕方がない。やるだけのことはやったから、失敗したってそれまでだ。

メイク室で、メイクしてもらいながら、胡桃沢がぼくに言った。

「明日、ちょっとだけ X が変わるよ」

「えっ、マジですか？」

「ちよつとだけ、ほんのちよつとだけね。初日が大成功しても、客観的にそんなには変わらない。世間の99・99パーセントはぼくらのことなんて知らない。日常は変わらず続いていく。でも、ちよつとだけ変わるんだ」

花川が笑う。

「そうそう、ちよつとだけ変わって、でも、その先が当たり前になる。それが続いていく」

いいのか悪いのかわからない。だが、ⁱⁱⁱ舞台に立つアドレナリンに取り憑かれたぼくたちは、そのちよつとだけの変化を求め続けずにはいられないのだろう。

那珂都が言ったことを思い出す。

^{iv}それが、ここにいて、そこを叫ぶということなのかもしれない。叫んだって、多くの人には聞こえないし、聞こえても聞き流されてしまう。でも、誰かには届く。そう信じられれば **X** は変わるのだろう。

本番がはじまる。興奮もあるが、不安もある。作品のファンは、たぶん阿里山暦の青イタチを楽しみにしている。

②そう知っているからこそ、開き直れる。

客入れがはじまり、楽屋に緊張感が走る。林も、この二日間はやけに優しい。古いだけではなく、若い役者たちをまとめて引っ張っていく演出家なのだと実感する。

はじまる前、出演俳優全員で輪になり、手を重ねた。

「じゃあ、初日の活入れは、今回、初参加の青イタチの琴くん」

胡桃沢にそう言われて、ぼくは驚く。座長がやるものだと思っていた。

だが、譲り合っている時間はない。ぼくは客席に聞こえない程度の声を上げた。

「大江戸ノワール！ 八百八町百花繚乱、初日！」

「締まっていくぜ！」

青イタチは特に一幕目の出番が多い。気合いが入る。

オープニングの音楽が始まり、みんなが持ち場に移動していく。

呼吸を整えて、舞台に飛び出していく。スポットライトが当たる。

「義賊、青イタチ！ ここに◎見参！」

ゲームでの決め台詞ぜりふを声に出す。もう何度も稽古場で叫び、繰り返した台詞だった。家でも声優の演技を何十回、何百回と聞いて、再現しようとした。

③ 背筋がぞくつとした。見られている。みんなぼくを見ている。

俳優だから、舞台の上で見られることには慣れているはずだった。だが、(注3) オペラグラスが客席できらきらしているのがわかる。ぼくに向けられている。

アドレナリンが身体中からだをめぐるのがわかる。

オリジナリティーなんか必要とされなくてもいいし、誰かの代わりだってかまわない。

ぼくはここにいる。ここにいるのだ。

あとは、Y だった。

胡桃沢の言ったとおり、客席が興奮し、心を動かされているのが、舞台に立っていてわかる。それを灯火のようになにかの頼りにしながら、ぼくは台詞を言い、立ち回りをし、演技をする。

ゲネプロの時とはまったく違う。

プロジェクションマッピングのことも、まったく気にならなかった。ぼくが動けばそれがリアルになる。ぼくが恐れ、おののき、それでも立ち上がれば敵の姿はそこに存在する。それが舞台だ。

俳優全員が、異様なテンションに呑み込まれたまま、第一幕が終わった。

休憩時間にトイレに行き、水分補給をし、汗で崩れたメイクを直してもらう。

幸い、第二幕がはじまって十五分くらいは、青イタチの出番はない。少しだけ息がつける。

楽屋の椅子に座って、団扇^{うちわ}で汗を乾かしていると、林が顔を覗^{のぞ}かせた。

「琴平、SNS見た？」

「そんな余裕ないっすよ」

「時間あったら見てみるって」

ようやくスマートフォンを手に取る。^(注4) ツイッターのトレンドに青イタチが入っていて、目を見開く。

「青イタチ、すごい。本物だった。生きてた！」

「阿里山くんの青イタチが好きだったけど、新青イタチもいい！」

「青イタチ推しの人、マジで生で見た方がいい。まだ地方公演はチケットあるから」

そう。たぶん、このトレンドも一瞬で、ほとんどの人はぼくのことなど知らないままだ。

このファンの人たちが感動して、喜んでくれているのは、キャラクターへの愛があるからで、ぼくがものすごい演技をやりとげたわけではない。それなりのキャリアがあるから、そんなことくらいはわかる。

だが、たしかに世界は少し変わった気がした。胡桃沢の言った通りだ。

④これ以上見たら、泣いてしまいそうで、ぼくはスマートフォンを置いた。

▼第二幕の開演アナウンスが少し遠くで聞こえる。

(近藤史恵「ここにいろはくら」『アンソロジー 舞台!』所収より。出題の都合上、本文中に一部変更した箇所がある)

(注1) プロジェクションマッピング——建築物の壁面などに、プロジェクターを用いてCGなどを投影し、立体感のある映像を見せる技術。

(注2) アンサンブル——主要キャストではない、役名のない登場人物。コーラスやダンスに加えて、一人で何役もこなすこともある。

(注3) オペラグラス——観劇用のコンパクトな双眼鏡。

(注4) ツイッターのトレンド——SNSの一つであるツイッター（現在の「X」）で、そのとき話題になっている事柄。

問 1 傍線部①の本文中における意味として適当なものを、ア～オの中から選んで答えなさい。

① 意味深に

- ア ごまかすように
イ あどけないように
ウ 思わせぶりに
エ のりくらりと
オ 歯切れ悪く

問 2 傍線部②の本文中における意味として適当なものを、ア～オの中から選んで答えなさい。

② 仕切り直し

- ア 白紙に戻すこと
イ 無期限延期
ウ なかったこと
エ 様子を見ること
オ 予定の立て直し

問 3 傍線部㉔の本文中における意味として適当なものを、ア～オの中から選んで答えなさい。

㉔ 見参

- ア お目にかかる
イ 駆けつける
ウ 控えている
エ 姿を現す
オ お出ましになる

問 4 傍線部㉕「お客さんが入ると、少しだけわかるんだ」とあるが、何がわかるのか。その説明として適当なものを、ア～オの中から選んで答えなさい。

- ア 平面的な映像がたしかに立体的な存在として観客の目に映っているか。
イ 観客が一体となって舞台に感情移入することができているかどうか。
ウ 映像と舞台上の自分たち役者が客席からどのように見えているのか。
エ 想定している通りの映像がプロジェクションに表現されているか。
オ 役者の演技によって虚構がリアリティとして受け止められているか。

問5 二か所の空欄 Xに入る表現として適当なものを、ア～オの中から選んで答えなさい。

ア 雰囲気

イ 評価

ウ 展開

エ 世界

オ 世間

問 6 傍線部②「そう知っているからこそ、開き直れる。」とあるが、この時の琴平の様子の説明として適当なものを、ア～オの中から選んで

答えなさい。

ア 観客の多くは本来の出演者である阿里山暦の青イタチが目当てで来るのだから、自分が彼の代役として出演していることがわかりさ
れたとしても仕方がないとして、無理に観客の心をつかむことをはじめから諦めている。

イ 今日の舞台の主な観客は原作のファンであり、阿里山暦の青イタチがすでに出来上がっているが、彼が今日は休みであることはどうし
ようもないので、代役でしかない自分は今日まで稽古をしてきたとおりに、やれるだけのことをやればいいと考えている。

ウ 初日の舞台が大成功を収めたとしても、客観的には何かが大きく変わることはなく、多くの人たちには知られることもないという胡桃
沢の言葉を思い出し、それまで抱いていた緊張感や不安が薄らいだことを感じている。

エ はじめて経験する二・五次元の舞台で、プロジェクションマッピングの実際の映像も見ることがない状態で演技をすることに対する緊
張感で押しつぶされそうになりながら、阿里山の代役だからといって特に気負うことはないと自分自身に言い聞かせている。

オ 本番を迎えて、いよいよ観客の前で演技するという高揚感とともに、失敗するのではないかという不安に包まれているが、観客は自分
ではなく作品を見に来るのだから、精いっぱい舞台を盛り上げようと気持ちを整えている。

問7 傍線部③「背筋がぞくつとした。」とあるが、この時の琴平の様子の説明として適当なものを、ア～オの中から選んで答えなさい。

- ア 六百人以上が入る劇場を埋め尽くす満員の観客の前に飛び出した瞬間、慣れているはずの観衆の視線に気後れしてしまっている。
- イ 人生初のスポットライトに照らされ、観客席のあちこちでオペラグラスのレンズがきらめくのを見て、突然我に返っている。
- ウ 声優の演技を何百回も聞いて再現しようとしたのに、観客の視線が冷たかったことで失敗したと悟り、恐怖で固まっている。
- エ メインキャストとして大きな劇場に立つのははじめてで、大勢の観客の視線が自分に向けられていることに高揚感を覚えている。
- オ 代役とはいえ、出番の多い重要な役柄を演じていることを舞台上で改めて実感し、役者として成功した喜びを感じている。

問8 空欄 Y に入る表現として適当なものを、ア～オの中から選んで答えなさい。

- ア 一気呵成^{かせい}
- イ 冷静沈着
- ウ 完全無欠
- エ 試行錯誤
- オ 無我夢中

問9 傍線部④「これ以上見たら、泣いてしまいそうで」とあるが、この時の琴平の様子の説明として適当なものを、ア～オの中から選んで答えなさい。

- ア SNSの中だけとはいえ、自分の演技が話題になっていることに驚くとともに、これまでの努力が報われた思いで感極まっている。
- イ まだ一幕目が終わったばかりだというのにすでに青イタチが絶賛されていて、この高評価を最後まで維持できるか不安になっている。
- ウ 愛されているキャラクターゆえとはいえ、作品のファンに自分の演技が認められたことで、役者として前進した喜びに包まれている。
- エ 異様なテンションの中で一幕目を演じきったが、演出家である林が観客の反応をそれとなく教えてくれたことで、冷静になっている。
- オ 観客の心を動かしたことは客席の空気から感じていたが、生の声を目にして、観客を魅了できた嬉しさで胸がいっぱいになっている。

問 10 本文の表現についての説明として適当でないものを、ア～オの中から選んで答えなさい。

ア 波線部ⅰ「へ？」には、「舞台稽古でもわからないし、本番になってもわからない」という予想外の言葉をどう理解したらいいのかわからず、あつげに取られている琴平の様子が表れている。

イ 波線部ⅱ「逆じゃなくて？」は、役者の演技と観客の反応との関係について、琴平は胡桃沢の言葉が全く理解できず、役者が観客の反応を導いていると常識的に考えていることを効果的に表現している。

ウ 波線部ⅲ「舞台に立つアドレナリンに取り憑かれたばくたち」は、役者にとって舞台に立つ瞬間は一種の興奮状態にあり、それが役者を続ける原動力にもなっていることを、比喩的に表している。

エ 波線部ⅳ「それが、ここにいるぞと叫ぶということなのかもしれない。」は、演技が役者の承認欲求を満たす手段であり、舞台は役者同士が自己主張する唯一の場所であることを、印象的に伝えている。

オ 波線部ⅴ「第二幕の開演アナウンスが少し遠くで聞こえる。」は、幕あいが終わったことを察しつつも、スマートフォンから受けた感動の余韻を消し去れない琴平の様子を表現している。

第二問 次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

今日しばしば「Virtual Reality」における《Virtual》を《仮想》と訳すことの問題性が指摘され、《仮想》に代えて《実質》の訳語がスィショウ⑥されているようである。だが、少なくとも「一九八〇～九〇年代のVRに関する限り、《Virtual》を《実質》と訳すのは極めてミスリーディングであり、《仮想》の方がまだマシである。《Virtual》を無闇に《実質》と訳したがる傾向は、「遠隔・現前」や「遠隔・存在」など世界内在的で道具的なVRの機能を以てVRそのものと同一視する技術開発者に特有のVR観とバイアスに因るところが大きい。だが、一九八〇～九〇年代のVRの多くは「原像」や「本体」としての「真実在」を想定しており、VRはその「模倣」や「模擬」、「代替」である。そうである以上、その「リアリティ」が、「真実在」でない「本物」を基準として、「偽」(take-)「疑似」(pseudo-)「準」(quasi-)といった含意をもつ「仮想的」(virtual)を限定詞として冠するのは当然の成り行きである。そしてその事情はボードリヤールが言挙げした社会的次元における「VR」である(ハイパーリアリティ)にも当て嵌まる。もちろんボードリヤールは彼一流のレトリックで「ハイパーリアリティ」の「向こう側」の存在を否定してみせるではあるが、「ハイパーリアリティ」が「作り事」であることは、テレビに映し出される「スペクタクル」のリアリティと、「体験としての現実」のリアリティとを比較してみれば一目瞭然である。「スペクタクル」はそれにどれほど逼真性があるうとシヨセン⑥は「見世物」であって、結局はそれが演出された光景に過ぎないこと、その「嘘臭さ」が観衆に見抜かれる運命にある。「スペクタクル」が「作り事」であることを観衆は心得た上で、その作り事の迫真性に酔い、それを堪能することがこの時期一世を風靡した思潮であるポストモダン(ボードリヤールの思想はその一つの典型である)の流儀でも作法でもあった。言い換えれば、「現実」と「スペクタクル」との差異を観衆が弁えていること、それが「スペクタクル」成立の条件なのである。

右の意味において、この時期の社会的次元における「VR」（＝ハイパーリアリティ）もまた、その一見デリダ風の表層一元論的な装いに反して、実質上「本体」を予想する物理モデルの軍門に降^{くだ}っているとみてよい。ということはつまり、逆に言えばマスメディアの「権威」とその「正当化」機能はこの時期まだ健在だった、ということでもある。

事態が急変するのは二一世紀に入って十余年が過ぎ、SNS (Social Networking Service) が破竹の勢いで世を席卷^{せつけん}し始めてからである。この時期にはマスメディアは完全にメディアの主導権をインターネットに譲り渡しており、人々はニュースに、テレビ番組や新聞記事を通じてではなく、「スマホ」のニュースアプリやインターネット上のまとめサイトを通じてアクセスすることが一般的になっている。そればかりではない。SNSはミニブログとも呼ばれ、個人的な意見・情報発信のツール、またリツイートによる「拡散」すなわち情報頒布の媒体として機能する。（Ⅰ）もちろんマスメディア本来の「放・送」とは違って、そのヒエラルキー構造は無視し得る程に小規模であり、また情報の波及範囲も限られている。さらに微小なヒエラルキーが無数に並立しているために、各^{（注）}ノードを頂点とするヒエラルキーのすべてが相対化され、それぞれのヒエラルキーの「権威」——つまりは他のノードからの「信頼」——も無きに等しい。その意味で、本来の「放・送」が立体的な円錐^{えんすい}によってイメージされるのに対して、微小「放・送」は水溜まり^{みずた}に降り注ぐ雨滴が作り出す二次元的な波紋群、ないし「無数の高原」^{（mille plateaux）}^{なぞら}に準^{なぞら}えることができる。波紋群は一部重なり合いながらそれぞれを打ち消し合いもする。②そこに特異点は存在せず、すべては相対的である。実際、微小「放・送」であるSNSから発信される情報の多くは出所不明の、どこまでが発信者の思い込みやイデオロギーで、どこからが事実や伝聞報告なのかが判然としない、確度や信頼性が疑われる代物ではない。

「情報」流通における「ネット・ワーク」の顕著な特性は、マスメディアの「放・送」がその円錐的構造の特権的場所である頂点（放送局・新聞社）から、底面（大衆）へ向けての一斉同報送信のかたちを取るのに対し、いかなる特権的場所も存在しない茫漠^{ぼうばく}たる二次元

的ネットワーク平面を構成する、ノード間でのランダムな授受という形態を取ることにある。(Ⅱ)したがって〈ネット・ワーク〉を流通する「情報」は不均質かつ **X** 的なものとなり、結果としてそうした「情報」から構成される「社会的現実」^{リアリティ}は濃淡のある斑状の、歪みに満ちたものとなる。このことは、出どころが異なるさまざまな「情報」がすべて、それぞれに固有の相対的な「現実性」^{リアリティ}を備えており、これらが合して情報社会のトータルな「現実」が構成されること、したがって③何かをきっかけに諸「情報」のレイアウトが崩れれば、それまでの社会的「現実」もまた簡単に組み替わることを意味している。これは例えば、〈マスメディア〉によって頒布された「情報」によって構成される **Y** 的〈現実〉と、〈マスメディア〉の「情報」頒布が(例えば報道管制や革命などによって)完全に遮断された場合の〈ネットワークメディア〉(例えばSNS)からの「情報」のみによって構成された「現実」とを比較してみれば容易に理解できよう。(Ⅲ)政治分野で流行中の「ポストトゥルース」(post-truth)という惹句^{じやく}は、〈マスメディア〉から〈ネットワークメディア〉へのパラダイム・チェンジによって惹き起こされた、こうした社会的〈現実〉^{リアリティ}の全面的な相対化現象を端無くもい表している。問題は、「ポストトゥルース」の語が引き摺^ひるネガティブな含意にもかかわらず、二〇一〇年代を通じて、このSNSの微小「放・送」が、従来のマスメディアの〈放・送〉に取って替わってきたという厳然たる事実である。そしてそれを象徴するのが二〇一七年の流行語ともなった「フェイクニュース」(Fake News)である。

「Fake News」はしばしば「嘘ニュース」などと訳され、二〇世紀に猖獗^{しょうけつ}を極めた「プロパガンダ」との連続性が指摘されたりもする。だが、「フェイクニュース」は「嘘ニュース」ではないし、「プロパガンダ」とも無関係である。「フェイクニュース」とはむしろ現在の〈ネット・ワーク〉パラダイムにあつて、マスメディアの「報道」^{カヴァレッジ}(Coverage)に替わって登場した、情報発信における事実上の標準^{デ・ファクト・スタンダード}(de facto standard)形態である。「プロパガンダ」とは違って「フェイクニュース」においては、その発信者に陰謀や捏造^{ねつぞう}の意識はほとんど無い。専門家の見地から見て、明らかにそれが間違った知識であっても、発信者の多くはそれを本気で信じて発信

し、またリツイートしている。そのことは所謂「^{注2} ネットウヨ」のツイートや、炎上騒ぎにおける情報拡散、一時期社会問題化した健康情報のキュレーションサイトなどを考えれば一目瞭然であろう。そうである以上、「フェイクニュース」とは情報社会において決して特殊な事態ではない。一般ユーザーの日常的な「つぶやき」や「拡散」のすべてが「フェイクニュース」になり得るし「フェイクニュース」であり得る。SNSから微小「放・送」される情報のすべてが「潜在的」(virtual)な「フェイクニュース」なのである。(Ⅳ)

その意味で、SNSもまた広義のVirtual Realityであると言えるのだが、このときの「virtual」は、前世紀のVRにおいてのような「偽 -」(fake)「疑似 -」(pseudo)「準 -」(quasi)といった「仮想的」なニュアンスを最も早い。なぜなら、そこにあるのは「コミュニケーション」連鎖という「事実性」(Facticity)の水準における不確定的(wharscheinlich)な「リアリティ」のみであって、その「裏側」には何もない——したがって、「原器」・「規準」をなすはずの「真実在」も当然存在しない——からである。

ここにおいて、先にそれが誇張され・僭称されたものであることを指摘した、ボードリヤールの主唱になる前世紀の「社会的現実のヴァーチャル化」が、今世紀、掛け値なしに成就したことが明らかとなる。(Ⅴ)だが、そのことは、これまでマスメディアの「権威」的構造によって再生産・維持されてきた唯一の「社会的現実」が、のつぺりとした涯てしない「情報」の「海」、不確定的な「コミュニケーション」の無限連鎖へと崩潰することをも同時に意味する。すなわち、それまでマスメディアが、無数の諸「情報」に対して「選別」と「序列化」のオペレーションを行使することで果たしてきた、「事実」の「正当化」(Legitimierung)機能が無効化することを意味する。

そのとき、マスメディアの「権威」を背景にしながら「選別」や「序列化」によってそれまで「事実」に付与されてきた「価値」が「[◎]ハクダツされ、「事実」の階層的秩序は「情報」の「大海」、〈価値〉無記号没〈価値〉なデータの「ゴミ」の山と化す。この際「ゴミ」の価値を決めるのは、〈量〉以外にはあり得ない。すなわち「いいね!」の数、リツイートした人数、レビューの星の数、視聴回数、

が配信情報Ⅱ「フェイクニュース」Ⅱ「ゴミ」の「価値」を決定する。

この規準は多数決原理に適^{かな}っており、その限りでは、インターネット・パラダイムにおいて登場した、従来のマスメディアによる権威主義的な「事実」の「正当化」に替わる、そしてアメリカ的民主主義とも調和的な、新しい「正当化」手続きとみなせ、結構なことではないか、と肯定的に捉える向きもあるかもしれない。だが、SNSにおける〈量〉を根拠とした「データ」から「事実」への昇格という「正当化」プロトコルは、唯一の〈社会的現実〉を完全に相対化し、また確固たる〈現実〉の安定的秩序を揺るがし、なによりも「事実」をビッグデータに解消することによって、「事実」の「正当化」手続きを（例えばAIによる）自動的データ処理のプロセスに委ねることをも意味する。それをしも「民主主義」と呼びたいなら呼んでもよいが、それは人間の意思決定を何ら介在させることのない非人称的な「民主主義」であろう。

（大黒岳彦『ヴァーチャル社会の〈哲学〉——ビットコイン・VR・ポストトゥルース』より。

出題の都合上、本文中に一部省略・変更した箇所がある）

（注1）ノード——コンピュータネットワークの「接点」。ネットワークに接続されたデータ端末装置など。

（注2）ネットウヨ——ネット上で右翼的な言動を行う人々。本来の「右翼」は社会主義と対立する保守主義でしかないが、ネット右翼はヘイトスピーチを撒き散らす差別主義者として批判されることが多い。

問 11 傍線部①に相当する漢字を含むものを、ア～オの中から選んで答えなさい。

① スイショウ

- | | |
|---|-----------------|
| ア | 意見がショウトツする |
| イ | 作業のショウリョクカをはかる |
| ウ | 早起きをショウレイする |
| エ | ショウビの課題への対策を考える |
| オ | 粘り強くコウショウを続ける |

問 12 傍線部②に相当する漢字を含むものを、ア～オの中から選んで答えなさい。

② ショセン

- | | |
|---|----------------|
| ア | 日本のセンシヨクの技術を学ぶ |
| イ | 敵の城をセンキョする |
| ウ | 都市のヘンセンをたどる |
| エ | ショウカセンを設置する |
| オ | センサクされることを嫌う |

問 13 傍線部㉔に相当する漢字を含むものを、ア～オの中から選んで答えなさい。

㉔ ハクダツ

- | | |
|---|----------------|
| ア | 日本各地をヒョウハクする |
| イ | 動物のハクセイを展示する |
| ウ | 両チームの実力はハクチュウだ |
| エ | ハクライの品物を手に入る |
| オ | ハクアイを自分の信条とする |

問 14 次の一文は、本文中の（Ⅰ）～（Ⅴ）のうちのどの部分に付け加えることができるか。適当なものを、ア～オの中から選んで答えなさい。

すなわち SNS とはネットワークの各ノードを発信源とする微小^{マイクロ・ブロード・キャスト}“放・送”（Micro Broad-Cast）なのである。

- ア（Ⅰ） イ（Ⅱ） ウ（Ⅲ） エ（Ⅳ） オ（Ⅴ）

問15 傍線部①「一九八〇～九〇年代のVRに関する限り、『Virtual』を『実質』と訳すのは極めてミスリーディングであり」とあるが、筆

者がどのように考える理由の説明として適当なものを、ア～オの中から選んで答えなさい。

- ア 当時のVRは本物や現実を想定したその代替物であり、そのことを認めたくて虚構としての迫真性に価値を見いだすものだったから。
- イ 当時のVRの『Virtual』を『実質』と訳したがるのは、技術開発者に特有の感覚であり、当時の一般的な感覚とはかけ離れているから。
- ウ 当時のVRはテレビに映し出される「スペクタクル」と同様に、演出された「見世物」というべき光景に過ぎなかったから。
- エ 当時のVRは「原像」や「本体」の「模倣」に過ぎず、本物の実在性は備えていなかったため、「仮想」と訳するのが最適だから。
- オ 当時のVRの『Virtual』を『仮想』と訳すことの問題性は、マスメディアの「権威」が作り出した架空のものでしかないから。

問 16 傍線部②「そこに特異点は存在せず、すべては相対的である。」とあるが、その理由の説明として適当なものを、ア～オの中から選んで

答えなさい。

ア SNSは、個人的な意見や情報発信のツールであり、SNSから発信される情報の多くは、マスメディアのように万人に共有されるべき特別なものではないから。

イ SNSは、個人情報の情報交換の場に過ぎず、またマスメディアのような情報網を持っているわけではないため、他者への影響力が微細なものではないから。

ウ SNSは、主導権をインターネットに奪われたマスメディアの代わりに、人々に情報を伝達するツールとなっているが、情報の確度や信頼性は疑わしいから。

エ SNSは、立体的な円錐形のヒエラルキー構造のマスメディアとは異なり、各ノードを頂点とする微小なヒエラルキーが無数に並立している波紋群だから。

オ SNSは、絶対的な権威や正当性、波及力を持つマスメディアとは違って小規模なコミュニティであり、それぞれに固有の独立的な現実を構成しているから。

オ	エ	ウ	イ	ア	問 17
X	X	X	X	X	空欄
局所	恣意	一般	部分	刹那	X
					・
Y	Y	Y	Y	Y	Y
安定	確定	普遍	全体	長期	に入る表現の組み合わせとして適当なものを、ア～オの中から選んで答えなさい。

問 18 傍線部③「何かをきっかけに諸『情報』のレイアウトが崩れれば、それまでの社会的『現実』もまた簡単に組み替わる」とあるが、それ

はなぜか。その理由の説明として適当なものを、ア～オの中から選んで答えなさい。

ア マスメディアは放送局・新聞社から大衆へ向けて一斉同報送信のかたちを取るが、「情報」流通におけるネット・ワークは、いかなる特権的場所も存在せず、平面的に拡散し、「情報」のレイアウトを崩壊させるから。

イ 報道管制や革命などによって統制された情報が、それまでの社会的現実を簡単に変えてしまうように、マスメディアによる情報は国家上層部の判断に左右されかねない危うさをはらんでいるから。

ウ 現代社会を変えたマスメディアからネットワークメディアへのパラダイム・チェンジによって、情報のあり方や信憑性しんぴょうが揺らいでおり、社会的現実には常に相対的なものとなりつつあるから。

エ ネット・ワークにおいては、無数に並立する微小なノードから発信された、その場その場での現実性を帯びた情報が合わさったものが、情報社会全体の現実として見えるに過ぎないから。

オ ネットワーク上には各ノードが無数に並立しているため、情報も無数に発信されており、大枠がある程度統一されているマスメディアの情報とは異なり、トータルな現実にはなり得ないから。

問19 傍線部④「Fake News」とあるが、これについての筆者の見解の説明として適当でないものを、ア～オの中から選んで答えなさい。

ア 「嘘ニュース」と訳されることが多いが、発信者の多くは「嘘」を発信しているという意識は無く、間違った知識であつても本気で信じて発信し、拡散していることが多い。

イ 「フェイクニュース」は「プロパガンダ」との連続性が指摘されることもあるが、政治的意図はほとんど無い一般ユーザーの日常的な「つぶやき」や「拡散」であることも多い。

ウ 個人的な意見や情報発信のツールであるSNSから発信される情報は、各々の「真実在」や「本物」を基準としているため、広義には潜在的な「フェイクニュース」である。

エ 「フェイクニュース」は特殊なものではなく、マスメディアの「報道」に替わって、現在の〈ネット・ワーク〉社会に登場した情報発信における事実上の標準形態であると言える。

オ 炎上騒ぎにおける情報拡散や、一時期社会問題化した健康情報のまとめサイトのようなキュレーターによるノイズの多い発信と比較すると、特殊な事態ではないことは明らかである。

問 20 筆者の主張として適当なものを、ア～オの中から選んで答えなさい。

ア SNSにおける意見や共感の〈量〉を根拠として「事実」の階層を捉え、「データ」から「事実」へと昇格させることは、従来のマスメディアによる権威主義的な「事実」の「正当化」に替わる新しい手続きとみなせる。

イ 〈社会的現実〉はマスメディアの「権威」的構造によって再生産され、維持されてきたが、マスメディアによる「事実」の「正当化」には〈選別〉や〈序列化〉が伴っており、それを手放して「民主主義」と呼ぶことには疑念がある。

ウ 「いいね!」の数などや〈量〉を根拠とする「事実」の「正当化」は、従来のマスメディアによる権威主義的な手続きとは異なるが、〈社会的現実〉の不安定化を招き、非人間的なプロセスとなる点で真の民主主義とは言えない。

エ インターネット上にあふれるさまざまな情報は、コミュニケーションの無制限な連鎖に過ぎない価値のないデータの「ゴミ」の山であり、「事実」としての正当性は、これまでのマスメディアの情報にはるかに劣る。

オ 「いいね!」の数、リツイートした人数、レビューの星の数、視聴回数などは、配信側にとっては多数決原理に適うものとして肯定的に捉えられるが、受信する側にとっては信頼性に欠ける情報の一部ではない。

第三問 次の設問に答えなさい。

問21 次の文の傍線部の四字熟語の正しい意味はどれか、ア～オの中から選んで答えなさい。

今の君には、不易流行の考え方で自分なりの小説を書くことが求められている。

- ア すでに発表されている作品の内容をそのまま模倣して、自分の作品とすること。
- イ 既存の作品の時代や登場人物などの設定を変え、新しい作品に見せかけること。
- ウ 尊敬する人の作品から影響を受け、原作をモチーフとした作品を発表すること。
- エ 他者の有名な作品を、揶揄、風刺、批判などの目的をもって模倣すること。
- オ 新しい着想を盛り込み、絶えず変化を求めていくことで、価値のある作品とすること。

問 22 次の文の傍線部の四字熟語の正しい意味はどれか、ア～オの中から選んで答えなさい。

A 社とB 社は長らく唇齒輔車しんしほしやの関係にあつたが、今後は袂たもとを分かつ可能性がある。

ア 互いにしのぎを削る良きライバルであること。

イ 信義によって結ばれ、裏切る恐れがないこと。

ウ 利害関係が対立し、互いに共存できないこと。

エ 利害関係が密接で、互いに支え合っていること。

オ 常に適切な距離を保ち、互いに干渉しないこと。

問 23 次の文の傍線部の語句の正しい意味はどれか、ア～オの中から選んで答えなさい。

文部科学省が、二〇二〇年度中にすべての小・中学校で一人一台のタブレット端末の導入を目指すという指針を打ち出したことを始めとして、エドテックは現在注目を集めており、市場規模も確実に拡大している。

- ア 時間や場所を選ばずに試験を受けることができるサービス。
- イ テクノロジーを活用して教育を支援する仕組みやサービス。
- ウ インターネット上で英会話などを学ぶオンライン講義。
- エ VR（仮想現実）やAR（拡張現実）を用いた疑似体験学習。
- オ 生徒一人ひとりの理解度に応じた学習コンテンツの提供。

問 24 次の文の傍線部の語句の正しい意味はどれか、ア～オの中から選んで答えなさい。

ゲームの収益が支払われるNFTゲームが登場しているが、収益の受け取りには信頼がおける暗号資産取引所で暗号資産の利用を求められることが多い。

ア インターネット上でやりとりできる仮想通貨。

イ 同一のデジタルデータを多数の参加者に分散保持させる仕組み。

ウ 現実では目にするのできない画面効果を実現させる技術。

エ 製品を利用することでユーザーが得られる利益。

オ デジタルアイテムの唯一無二の所有権を証明するデジタルデータ。

問 25 次の文の空欄に当てはまる語を、ア～オの中から選んで答えなさい。

人々の価値観が多様化している現代では、同じ機能を持つソフトでも、人によって満足度が異なる可能性が高い。そうした状況を受けて、利用者が利用によって得られる体験価値を表す を追求する必要性が生まれている。

- ア ユーザーアカウント
- イ ユーザーインターフェース
- ウ ユーザーエクスペリエンス
- エ ユーザーフレンドリー
- オ ユーザーカスタマイズ

